

## 欲望と創造性

ラカン、ウイニコットと創造性の女性的起源

パトリック・グイヨマール

(児島創二訳)

私が皆さんに提示する主題とは、ある特殊で限定された点に関して、隔たりを開き、測定することである。つまりラカンの思考とウイニコットの思考との間の、重要なある隔たりとある差異を、ということだ。

この隔たりを、二人のどちらかに有利なように切り縮めてしまつてはならない。そうした目標、そうした狙いは、よしんば追求したところで、本質的に失敗するべく定められているように私には思われるのだ。

ウイニコットとラカンの思考、および理論的な参照先はいくつかの点に関して異なり、くい違っている。彼らは二律背反的アンチノミーであると言え、それはすでに単一の出会いの場を想定してしまつていることになるはずだ。もちろん、数々の出会いと合流の場が実在しているのであつて、それらは分析経験の核心に関わつてい  
るのだが、しかしそれらはまた錯覚パースペクティヴをも作り出す。ウイニコットの意味での錯覚、それから脱錯覚しなく  
てはならぬある出会いの錯覚だ。視点が、経験が思考され考察される際の出発点が、同じではないのである。

ウイニコットが翻訳され知られたとき、いずれにせよフランスではラカン派の共同体においてだったが、

それほどラカンからかけ離れているという印象を彼は私に与えなかった。このことは驚きをもたらすかもしれない、しかし結局のところウイニコットが環境というものを強調していたことは、〈他者〉と〈他者〉の欲望とに関する問いに親しんだ者からすればいたって理解しやすかったのである。それは自明なことだったし、つまるところ、おそらく他の場合よりもはるかに具体的に提起されてもいた。

多くの差異にもかかわらず、遊戯と移行空間とは、フロイトとラカンの一読者にとって容易に親しいものとなりえた。ただしそれは、両者とも、しかしフロイトの読者ラカンのほうがいっそう、糸巻きの遊戯に重要性を与えていたからというだけのことかもしれない。発話ハバと反復の間の、想像界と象徴界の間の本質的な分節化において象徴化を行い、制御を司る遊戯に。

我々はウイニコットを読む用意ができていた、しかし我々はまた彼を、我々を何かから引き離し、新しい何かをもたらししてくれる者としても読むことができたのだ。先行する諸々の習慣、儀式、および構築物の裏をかく新しい遊戯や、遊戯の中の別の遊戯、それにまた別の遊び方といったものがそれだ。

こうした出会いの場がある一方で、私は双方を読めば読むほど、彼らが深くくい違っているのがいっそうわかってくる。近づけようとする、ひいては併合しようとする企ての中に自分がいるとは私は思わない。そのような企ては私には、ほとんど全ての点について、双方の立場、関心、それにまた欲望の、核心を作っているものからは逸れているように見えるのだ。

読解、再読解を重ねるうちに、とある文が私を引き止めた。それこそは皆さんの前でこの問題系を繰り広げたいという熱望と欲望をかきたてたものだ。その文は、ウイニコットが創造性の概念の研究に捧げている諸論文の一つの、冒頭に見つかるのだが、この概念こそは彼の作品を鼓舞しているものと深く連携しており、従前は何人たりとも与えてはいなかったある内容、ある力を彼が与えている、抜きん出てウイニコットの

いえる概念である。

創造性が参照させるものとは、ある芸術作品の創造ではない。創造性とは実存しているという感覚〔sentiment d'exister〕のことを指している、各人の生に結びついている。それは創造的な、あるいは創造者のな生をもつと人が言う意味で、人格的な創造性〔une créativité personnelle〕である。創造的であること、それは自分が実存し、生きていると感じることだ。創造性は外的現実に向き合うあらゆる態度にある彩りを与える。彩り、というのは諸々の色がつくことであるが、また諸々のコントラストが具わることもあり、つまりは多様性を与えるというに等しい。

「何よりもまず先に重要であるのは、生は生きられるに値するという感覚を個人に与えてくれるような創造の様態である」と彼は書いている。

創造性の概念は、ウイニコットにとつて、次のような問い全体の重みをもっている。つまり、生は生きられるに値するという感覚を与えてくれるものは何なのか、という問いだ。いやしくも有意味であるとすれば、その問いは数々の出来事が、いくつかの苦痛、傷や骨折のような苦痛の後で、生きたいという欲望を問い質した、もしくは引き起こしたということを含意する。「ただし正確には」生きたいという欲望以上に、自分は生き生きしていると感じる感覚の再発見を「引き起こしたのだ」。それは存命中であるという〔単に生物学的な〕意味で、生きたいという欲望とは、全く同じものであるというわけではない。

さて、ソフォクレスの悲劇、『アンティゴネー』に関してラカンが行なった読解、および彼がアンティゴネーの欲望を分析し、ひいてはその閃光に捕えられ、魅了されて、彼女を一つの見本モデルにしている仕方に対して関心を持つようになる中で、私は次のものによつて強く感銘を受けた。つまりそれは、この人物像をめぐって、彼が結局のところは何かしら、生に関するある悲劇的な感覚のようなものを言表している仕方である。すなわち生、実存しているという感覚、および生の悲劇の間の、彼の目にとつて本質的な紐帯というものを、だ。

ある所与の瞬間に、彼はこのような表現を手にする。「欲望<sup>②</sup>とは、それを欠けば生が生きられるに値しないようなものである。」話題になつてゐるのはアンティゴネー、まさしくいくつかの価値や、オプシヨンの選択をし、そして死を選んだあと、墓へと歩いていく者だ。彼は、それを欠けば我々が自らの生きる理由を捨て去ることであろう当のものとは何なのかを、明確にしているのだ。人はどんな代償を払つても生きる事ができるのか。そして自分自身の生きる諸理由を捨てて——あるいは失つて——なお生きるということが。問いを定式化するこの古代的な（古典的な、また悲劇的な）様式<sup>③</sup>に、ウイニコットはある別の表現を提示する。その表現は生の英雄主義を締め出さないが、しかしそれは別の調子を持つようになってゐる。人は果たして自分が真に実存していると感ずることなしに生きうるのか、自分が生きておりかつ誤つて生きてゐるのではないと感ずることなしに生きうるのか——歪曲された、あるいは偽りの生の中にいるのでもないかぎり。

そこにはある同じ表現によつて具体化された一つの出会いがある。それは「生が生きられるに値するものであるようにするもの」という表現だ。この出会いは、ウイニコットにとつての創造性、ラカンにとつての欲望<sup>④</sup>という、二つの概念の中に書きこまれてゐる。双方にとつて、それらが書きこまれてゐる概念的なつながりにおいて、そしてまた、それらがうがつ隔たりにおいて理解し、思考すべく与えられてゐるのは、分析という人間の経験のうちの最も生き生きとしたものである。内的経験、「それは」ラカンにとつては欲望の悲劇であり、ウイニコットにとつては実存しているという感覚だ。「彼にとつて」生き生きしているということ、それは創造的であるということなのだ。

創造性の概念は、肯定的で晴れやかなところをもちうるという点において、いかなる暴力の、いかなる悲劇の、いかなる反抗の記憶も含まない、と考える人もいるかもしれない。要するに、何ら生の極端さに属するものの記憶は、ということだ。「しかし」それは一個の誤謬なのだ。

ウイニコットにとつて、それは生と死の賭け、悲劇的であり、暴力と服従の賭けでもあるような賭けに根ざすものである。実際、何に彼は創造性を対置しているだろう。大いなる徹底性をもって彼が定義している服従にである。それは、追従の要素を伴う、外的現実への、自分を合わせ、順応させなくてはならぬ、世界への服従だ。実例として、彼は自らの家庭で支配されている個人たち、強制収容所での生活を経験した人々、そして政治的迫害をこうむった人々を引合いに出す。彼は文明化の否定的な面、あらゆる希望を断念してしまい、それに苦しんでいる人々に言及し、またあらゆる希望を断念してしまったがためにもはや苦しみさえしない人々に言及する。

そのような服従は、暴力の中で課され、耐え忍ばれ、あるいは内面化されると、それとともにある空しさや空ろさの感覚を引き起こす。もはや何ひとつ価値のあるものもなく、何ひとつ重要なものはない。生への愛想尽かしや空しさは深い内的敗北に伴って生じるが、その敗北は自らを忘却しがちなのだ。自己自身および他者たちとの紐帯は失われ、解かれてしまう。

個人の創造性はこれらの環境要因によって破壊されうる。破壊はあらゆる苦痛の無化に、そして真の自己セルフ「[I]ts」と偽りの自己セルフとの不可逆的な解離にまで至りうる。

二〇世紀の歴史は、その最も極端で最も破壊的な諸側面と、個々の生に及ぶその諸結果から見れば、創造性の概念の構築とそれに関する思考の地平とに不在であるところの話ではない。「かえって大きな存在感を示している」。

いかばかり欲望の概念が主体に関するラカンの思考の中心軸を構成しているかも、また「その程度たるや」「治療の方針」の見直しに至るほどだということも、再説する必要があるか「ありはしない」。生きることは欲望することである、そして欲望することはまたぶつかりあうこと、抵抗すること、譲歩しないこと、そしておそらくは創造することでもある。欲望することの理由なくして生は生きられるに値するのか。しか

しラカンが欲望することと言うところで、ウイニコットは創造することと言う。創造性、真の自己は、全面的に失われることはありえない。極端な服従において、偽りの人格の分裂症的な樹立スキゾイドにおいてすら、どこかに隠されたまま、ある秘密の生、創造的であるがゆえに満足をもたらす生は存続しているのだ。しかし、もし創造的であるものが全て隠されていて、もはや消息を絶つてしまうようであれば、そのとき生きていくか死んでいるかはほとんど重要でない。自殺は、と彼は書いている、ほとんど重要性をもたない。<sup>(4)</sup> 自殺への自己破壊的な諸要素への非常に明瞭な参照は、それとわかるかたちで現れている。創造性はかくして自殺の危険や、自殺の誘惑に相對して、秤の反対側に置かれている。あたかも自殺は創造性の、その諸手段とそれが表現する全てのものの挫折の中に突発するかのようだ。

しかし、たとえ創造性がラカンにとっての欲望と同じくらい中心的な位置をウイニコットにとっては占めているにしても、創造性は欲望ではない。欲望とは死の欲望であるが、創造性はかかる地平に位置づけられない。たとえフロイトの諸々の主張に対するメラニー・クラインのこだわりがその理解を屈折させたのであるにせよ、ウイニコットは死の欲動という概念を拒絶する分析家らの一員であるだけになおさらそうなのだ。

彼はこう結論づける。「我々の理論は、創造的に生きることがある良好な心的健康について証言しているということ、および服従は、実存の悪しき基盤を構成するということを前提する<sup>(5)</sup>」。ウイニコットが創造性の概念を繰り広げるのはそのような地平においてである。彼を読み、再読していると、次のような印象がはっきりしてくる。つまりこれこそは、遊戯という用語ともども、彼が、非常にしばしば批判的な仕方である。他の精神分析家たち、それも特に彼のクライン派の同僚らと、袂を分かつようにしている用語の一つなのである。

論文「創造性とその諸起源」の終わり、彼は創造性のあるところ、もはや羨望はないと主張している。

クライ的な羨望は創造性の一つの挫折なのだ。したがって、いかなる羨望の乗り越えも、とりわけ欲望の中ではなく、かえって反対に〔その〕傍ら、手前に、〔つまり〕彼が創造性というこの用語の中にこめている全てのもの〔の中〕にある。羨望とは創造性の挫折であり、そして創造性、実存しているという感覚、生きているという感覚は、同時にある治療薬でもあれば用心でもあつて、羨望に対して我々の備えができているようにしてくれるものなのだ。

実存しているという感覚と創造性との源泉は、いかなるものだろうか。

彼の主張はいたってわずかな数の命題に要約されうる。まず初めに、創造性はその根拠を彼が純粋な女性的要素〔*élément féminin pur*〕と呼ぶものの中に見出す。母性的なものとは女性的なものに関する問いを立てる全く常ならぬ仕方だ。この要素はその起源とその整合性とを、彼が「ほどよい母親」と呼ぶ母との、この特別で、本質的で、原初的である紐帯の中に見出す。必要な錯覚、その内で子供が母の乳房へと同一化できるこの良好な環境、これらは彼の使う語だが、存在することという状態についての語であつて、行なうことという状態についての語ではない。対立は存在することと行なうこととの間にある。この差異において、「行なうこと」は男性的要素と同一化されており、ある貪欲な、力動的でそれゆえ独占的な、引き離す、破壊的な、欲動の能動性抜きには考えられない。

存在することに関する問い、子供にとつてのこの乳房と同一化できる可能性とはつまるところ、子供と母親との間での紐帯および関係という様相における、母というものをある種思いのままにすること、ある種の思いのままにできるという可能性にあたるわけだが、それはある基盤〔*une base*〕の存在と可能性を表しているのだ。この語は彼がときどき創造性に関して用いているが、大変単純な、大変ありふれた用語だ。その機能は本質的なものである。一つの基盤とは、諸欲動の弁証法、欲動の両価性、力動、引き離し、暴力、破壊性が、母をも子供をも破壊することなくやがて展開しうる際の出発点なのだ。つまるところあたかも、欲

動の両価性に関する問いは最初の紐帯、最初の受容、あるいは最初の同一化、彼が「存在すること」と名づけるものに比べれば二次的であらざるをえないかのようだ。

この「存在すること」(being) という語は、しばしばウイニコットの思考の中に回帰してくる、そして彼はそれらを「行なうこと」(doing) に対置する。それらを、またそれらの対立がもつ一方から他方への移行という意味をめぐって、彼はこう書いている。「存在しているという感覚は、一体であるという事実<sup>⑥</sup>に先立つ」。一体であること、およびそれが含みうる個性化や、分離や、区別や、同一化に関すること全て以前に、何かしら先立つものがある。彼はそれを何ものにも、ある空虚にも還元せず、「存在している」という感覚[sentiment d'être]と名づける、あたかもそれが一種の生地、織物、肉体であって、この特別な関係の中に捕われた子供に、実存しているという感覚とこの創造性の手段とを同時に二つながら与えてくれるかのようだ。そこには移行空間と、創造されるのと同程度に見出されるのでもある対象とに関する、諸前提および分節化が見つかると。

この点については、ラカンとウイニコットとの間に、いかなる関係もありはしない。文字どおり、いかなる関係も。ラカンは不連続性の、過度の、激化の、距離の思想家である。彼は太古的アルカイックなものを寸断された恐ろしい宇宙の中に位置づける。そこにあるのは袋小路であって通路ではない。喪失の、不和の、空虚の、無の思想家であり、また死の思想家である。

ウイニコットはといえば、全くそのような人ではない。連続性の、生の諸手段の、あらゆる通路、あらゆる紐帯を利用できる能力の思想家だ。創意の、想像的なものの、移行空間の、シニフィアンの支配というよりは言語の使用の思想家だ。体系を作る理論家ではなく、危険ではない孤独を、恐れるに及ばない死への近さを、それ自体の内に固有の打開策を含むような抑鬱を想像する人だ。

ウイニコットはラカンのように、これかあれか、ゼロか1か、ファルスか欠如かといった、二項対立の思

思想家ではなく、生きうるものを、生を、そして分析をこの空間に構築する人である。この場、それはそれ自身の創造性である。この場は二項対立的な論理には従わない。何か中立的なものが現れる。それは、一方でも他方でもないという意味で中立的なのだが、何かが中立化し、それが「はい」か「いいえ」へと、一方か他方へと落ちつくことを免れさせるのだ。この中立化は、ある意味で、深く分析的である。分析の中立性、それは単純に退引にすぎないのではなく、また中立化、それゆえに潜在的な空間の創造、技法における創意性にして、さらには胸襟を開き、「相手を」受け容れることから生じる中立化によって、分析可能なものをあらしめ、そして断絶、不連続性、それゆえに悪しき切断が生じかねないところに、連続性をあらしめる可能性でもある。「この悪しき切断とは」切断ではないような切断、喪失というよりも毀損であるような切断のことだ。この点について、ウィニコットとラカンの間には、関係はなく、ある絶的な不連続性がある。視点は全面的に別であり、何も、絶的に何も同じ位置にない。

ある別の領域が、さらに出現せしめる——今度は根本的な仕方——彼らのくい違いを。

それは隣人〔prochain〕に関する、隣人〔Nebennensch〕に関する問いで、『科学的心理学』草稿『Entwurf』の中に現前している。特にセミネール『精神分析の倫理 l'éthique de la psychanalyse』でラカンによって、しかしまた、モニク・シュナイダーによってはるかにもっとフロイト的な批判的視点から長々と注釈が加えられている、草稿のあのだりの中だ。他人に、隣人に、救いをもたらす他者、フロイトが隣人と呼ぶ者に関するコンプレクスが問題なのだ。隣人への、他人への訴えは一人の子供からやって来る。その子供は助けを必要とし、よるべなさの中にいて、ある他者に救いを求めているのだ。

「身近な人間存在の知覚に関する複合体は二つの構成要素へと分割される。そのうちの一方は恒常的な配置を通じて出てくるもので、ものとしてのある集合を形成する。対して他方はある想起の働きによって理解される、すなわちそれは自身の身体からやって来るある情報へと帰せられうるのだ」。

隣人コンプレクスにおいては、人がそれを了解する仕方がどうであれ、自己から出発してある要素が理解されうる。それは、人が話しかけることができる相手で、それに関して人はこのものは我々の言うことを理解できると想像するのであり、何かしら親しいものが理解されるのだ。ある他の部分が一貫性のある一つの全体として自らを提示する。それは濃密で、不分明であり、ドイツ語でいうところの「あるもの」(Ding)なのだ。それから出発してラカンは自らの理論を構築する。ものなるもの [La chose]、彼がラシヨーズ [L'absence] と呼ぶ(ときには一語で書き、あるいは非ものなるもの [l'absence] と書く)当のもの、それは隣人の核心にある、あの一貫性のある全体なのである。それは揺るがず、不気味で、敵意を含み、脅威的である。そしてそれはラカンが、悪や、邪悪さや、敵意や、不分明さに関する問いを思考する上で役立つ。

ラカンの思考の動きは——私がいささか急ぎ足で進むのをどうかご容赦願いたいところだが——単純である。隣人の核心にあるものは二重の問いを提起する。この隣人とはいかなる相手なのか。なにしろコンプレクスは子供から出発して構築されるのだから、それは母であるのか。それはまた兄弟でもあるのか。傍らにいる男性もしくは女性であるのか。

それは母であると考えるとすれば、ある程度論理的であろう。フロイトは子供の叫び声のことを話しているからだ。彼は本文中の少し前のところで次の事実を喚起している。つまりそのような対象(隣人)は「同時に最初の満足の対象でもあれば、その上さらに最初の敵意の対象でもある。それはまた、たった一つの助けをもたらす力でもある」。

それは隣の人であり、すなわちむしろ兄弟であると考えられることもできる。この点に関して、隣人の享樂を喚起する人も何人かいることだろう。母性コンプレクスや、エディプスもあるが、しかしまた兄弟に関するコンプレクスもあり、これはエディプス・コンプレクスのもつ近親相姦的な要素と全く同じように猛威をふ

るうものだ。

この兄弟コンプレクス（血を分けた兄弟であれ乳兄弟であれ）という様態の下に隣人を認識した上で、ラカンはこう断言する。「母は、母なるものは、もの〔*das Ding*〕の位置を占めます<sup>(9)</sup>」。しかしものとは彼にとつて「主体の絶対的な（他者）」なので、彼は急いで他性のこのあまりにも人格的な次元を退去させ、他者の核心に、彼が空虚、穴、無、虚無、などと呼ぶ、絶対的な他性のあらゆる形象を置くのだ。この空虚化は、つまるところ、隣人の中にある、傍らに在るものの中にある、救いをもたらすものの中にある、あらゆる人間性の空虚化であり、これがラカンの思考によって達せられる運動である。二つの範例的な引用が曖昧さなしにこのような方向性を例証してくれる。

創造の観念はラカンのもとにも現前している。それは発話<sup>パロール</sup>の創造であり、発話<sup>パロール</sup>は創造者的である。発話<sup>パロール</sup>に関する思考はその創造者の能力の庇護下でなされる。諸々の語<sup>ことば</sup>がものを創造するのだ。しかしこの創造は、主として以前は実存していなかった何ものかを実存せしめるといふ様態の下に考えられているので、無からの創造として考えられることになる。それは創造に関する哲学的観念、ある創造論的な主張であり、歴史的でも、進化論的でもない、ある無からの創造〔*une création ex nihilo*〕である。ラカンは無から出発してしか創造というものを考えない。そうすることで、彼はもちろん創造性の概念を空虚にし、それが持ちうるある紐帯の記憶、ある関係の記憶といったものを全て抜き去るのだ。すなわち、見出される何ものかの記憶、つまるところ、用語のウイニコットの意味における錯覚の記憶といったものを全て、ということだ。

ウイニコットにおける創造されー見出される対象、それは現存する母との関係の、一つの様相である。ラカンにおいては、無から出発する、無からの、ある発話<sup>パロール</sup>の再創造がある。ゆえに驚異的なことではないし、皆さんを驚かせるようなことはないはずだが、一九七〇年のラカンはそのセミネルにおいて明瞭にこう言っているのだ。「汝の内にあるこの空洞自体、汝自身の空虚を別にすれば、隣人はいません<sup>(10)</sup>」。

勇気を出してこれを理解するべきだ。それは一つの真理として理解することができるし、ある挑発として理解することもできるし、ある思考の力を理解することもできれば、それを外傷後の仕方、ある欲望の断言の中で理解することもできる。しかしもし隣人がいないというこの事実を措定しなければ、ラカンも、彼の経歴のほうはなおさら、理解できなくなってしまう。ラカンの孤独、それが意味するのは、「隣人はいない」ということだ。

分析的には、ウイニコット、および彼がもたらすものに戻るとすると、明らかに、我々はそこで二つの概念を手に入れる。それは創造性と欲望で、全面的に二律背反的アンチノミーである。結局のところ、ラカンの立場はあらゆる身体を、あらゆる肉体を抜き去って空虚をもたらすのだから、現存するこの他者、隣人ネーベンメンシユは、もはや一人の母ではなく、一人の兄弟ではなく、一人の隣人ではなおさらでない。それは彼の内に見えるあの深淵なのであるが、さらには各自の内にあるあの空虚である。

これは徹底的な非人間化であるが、そうはいつでもラカンが読んでいた人々との対話を伴わないわけではない。例えば聖アウグスティヌスがいる。彼にとって神は人間の核心にいたものであった。<sup>11</sup>人間の核心には、とラカンは応じる、自己自身の空虚がある。ラカンにとってのよるべなさ(Hilfsigkeit)、それは、死に直面したとき、人はもはやどんな相手であれ誰かをあてにすることができない場合のことである。ウイニコットはよるべなさを語っているのだろうか。彼はまさしく創造性についての文章の中でそれに関して語っている。そこで彼はこのよるべなさという概念を喚起しているのだ。ウイニコットにとってよるべなさとは何であるのか。それは人が創造的な生をもちやもたないときのことである。よるべなさは、人がもはや自らの内に実存しているという感覚を感じないときに突発する。彼が「秘密の生」と呼ぶものにおいて、主体がもはや自らを生きていると感じないときだ。

思考と、それから転移とに関する〔ラカンとウイニコットの間の、二通りの〕宇宙と紐帯は、それらの結

末においても、それらの起原におけると同じく二律背反的である。<sup>アンチノミー</sup>

選択をすべきなのだろうか。選択といってもどんな意味をもちうるのだろうか。どんな代償を払ってでも生きることなど、何人にもできないということは本当であるにしても、死を正面から見すえつつ生き延びることしか唯一の選択としてもてないようなこととはある。しかし、自分を生き生きしたものにしてくれた諸々の紐帯、その中で実存しているという感覚が創造された諸々の紐帯の生き生きとした回想の中で、自分は実存していると感ずることもやはり可能だろう。選択する必要はない、私としてはそのような選択のもつ意味を認めない。

## 註

- (1) 「訳注」以下、著者は主に論文「創造性とその諸起源」(原題は「Creativity and its Origins」)に即して論を進めている。この論文の邦訳は、D・W・ウイニコット『遊ぶことと現実』(橋本雅雄訳)、岩崎学術出版社、一九七九年、九一—二〇頁に収められている。
- (2) 「欲望は、欲望と呼ばれるものは、臆病者の振舞いをするようでは生が意味をもたぬというようにするのに十分足りる」(Jacques Lacan, *Écrits*, Paris, Seuil, 1966, p. 782. 「ジャック・ラカン(佐々木孝次訳)「カントとサド」、「エクリ III」弘文堂、一九八一年、二八〇頁。[ただし既訳を参考にしつつ新たに訳した。以下で参照される他の文献についても同様である。])
- (3) 「そして生命のために、生きるこの諸原因を失うなかれ [Et non proper vitam, vivendi perdecucasus]」、ラカンによる引用、同前。「なお、同書四二六頁の訳注によれば、この表現はローマの詩人ユウェナリスの『諷刺詩集 Satirae』第八巻に由来するという。邦訳の該当箇所は、ユウェナリス『サトゥラエ——諷刺詩』(藤井昇訳)、日中出版、一九九五年、一八四頁である。]
- (4) 「訳注」D・W・ウイニコット『遊ぶことと現実』(前掲書)九六頁。
- (5) 「訳注」D・W・ウイニコット『遊ぶことと現実』(前掲書)九二—九三頁。
- (6) 「訳注」ただしウイニコットは「一体であるという観念」と書くところ (D. W. Winnicott, « Creativity and its Origins », in *Playing and Reality*, Middlesex: Penguin Books, 1974, p. 94: « This sense of being is something that antedates the idea of being-at-one-with, [...] »)。また D・W・ウイニコット『遊ぶことと現実』(橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、一九七九年)一一二頁の該当箇所でもそう訳されている。
- (7) Sigmund Freud, *Lectures à W. Fliess*, *Edition complete*, Paris, PUF, 2006, pp. 639-40. 「フロイト「心理学草案」(総田純次訳)、『フロイト全集

- 3』岩波書店、二〇一〇年、四四頁。
- (8) *Ibid.*
- (9) Jacques Lacan, *Le Séminaire, Livre VII. L'Éthique de la psychanalyse*, Paris, Seuil, 1976, p. 82. 「ジャック・ラカン『精神分析の倫理(上)』(ジャック・アララン・ミレール編、小出浩之・鈴木國文・保科正章・菅原誠一訳)、岩波書店、二〇〇二年、九九頁。ただし原文を縮めて引用されてる。」
- (10) Jacques Lacan, *Le Séminaire, Livre XVI. Dun Autre à l'autre*, Paris, Seuil, 2006, p. 25.
- (11) \* *Deus in inferior intimo meo* 「私の最も奥深い内面よりもさらに奥深くある神」\* 「アウグスティヌス『告白録』第三卷第六章一一節、『アウグスティヌス著作集 第五卷I』(宮谷宣史訳)、教文館、一九九三年、一四〇頁。』